

國民經濟的社會政策

小 引

本文は先に商學研究第四卷第一號に譯載したるロバート・ヴェルブラント教授の論文「經濟政策の根本思想」の縮稿として同教授より福田博士に送られたものである。茲に福田博士に宛てられた教授書簡の一節を掲げて此の意味を明にし併せて前論文の参照を乞ふ。——Der Aufsatz „Nationalökonomische Sozialpolitik“ ist eine Parallele zu dem „Grundgedanken der Wirtschaftspolitik“。——

今言語上の注意と、最も鋭利なる批評とを以てマルクスの學說を仔細に吟味するならば、人は彼の餘剩價值理論に於て不易の眞理核を見出すであらう。一方が働けば働く程、他方は彌々富裕となる、これマルクスが「資本論」に於て取扱へる階級關係の、否定し難き社會學的構造である。更に、此の從屬性が一方を強制して實際斯様に餘剩價值を讓渡せしめ、以て他方をして大に自ら富むを得しめることは、吾々が純歴史的に見るところである。彼は搾取に甘んぜざるべからず、斯くの如きが産業労働者の歴史的運命であつた。

此の反對の緩和者として立つ社會政策―それは不道德ではないであらうか。抗議は茲に獨り倫理的にのみ示されて居るのではないか。或る不正を其の根柢に藏する斯かる平和は良心に背かないであらうか。

サンデカリズムは右の如く感ずる。其のユージェノツトの熱情に依つて、斯かる抗議者に極めて深き理解を有するマックス・ヴェーバーは、サンデカリズムの態度を以て「價値合理的」なりと解せしめる、其處に問題となるものは行爲の合目的性に非ずして唯適當なる感情の表現、即ち倫理的欲望として感ぜらるゝ抗議のみであるとする。

併し吾々が茲に問題とするのは主觀的の必然性ではない、客觀的のそれである。マックス・ヴェーバーと共に「目的合理的」として示さるべき所のもの、即ち樹立せられたる或る目標に對する合目的々なる、技術的に正當なる道程として科學より推薦せられ得べきものゝみが茲に吾々の關するところである。蓋し吾々は茲に科學的社會政策に就いて顧慮するが故である。斯くしてのみそれは可能である。

併し果してそれは可能であらうか。何となれば、それは或るものが抑も如何なる目的に對して合目的々なりやの問題そのものに對して坐礁するかに見えるからである。無數の目的が考へ得られ、其等は吾々の心の中に相争ひ、互に融合すべからざる反對に立つて居る。此のことこそ、マックス・ヴェーバーをして一切の科學的社會政策を疑はしめたものである。それ故に氏は亦云ふ、諸の社會的要求を「是認せられたるもの」として示すことは傲慢なる潜越行爲であり、又かくして何事かを證明せんとするは科學的手段を以てしては固より不可能である

と。氏にとつては公平なる判断とは一の名辭上の矛盾である。(1)

(1) Archiv für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, Bd. 20, S. 618.

實踐科學としての國民經濟學に對する此の認識論的批評に就いての詳細は、拙著『經濟』(Ökonomie)、オットー・ハイマー祝論集『經濟と社會』に於ける余の論文、及び余の『國民經濟學入門』(Einführung in die Volkswirtschaftslehre) 第一卷(結論)、第四卷を参照し、併せてマックス・ヴェーバーと余との意見の相違を見られ度い。後者に就いて其の最初の概論は一九一七年の Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft に出づ、(其の論題は R. Wilbrandt, Die Reform der Nationenökonomie vom Standpunkt der Kulturwissenschaften——譯者註)

吾々は茲に一見不可解なる問題に逢着する。教會社會主義、否一般に社會主義の政敵は好んで此の問題の所謂不可解の裡に隠れんとする。而も此の近づき難くも思はるゝ隠れ場所より相手を攻撃することは、マックス・ヴェーバーに依つて正しくも「pseudowertfrei」(似非價値自由)として示されたる彼等の態度をして、其の然らざるものなることを妨ぐるものである。彼等は自らマックス・ヴェーバーの上衣の裾にすがり乍ら、大人物の從者として安心し、非政策的、純客觀的研究は斯くして安全に保護せられ、自己の傾向、即ち有名無實なる、表面的なる階級鬭争の傾向的なる鬭争は彼等自らには全く意識せられずとの口實の下に意を安んじて居るのである。而も事實は之を以て終了しない。其の時々に合目的々なるとは實際諸の目的に繫屬する。而して其等の樹立に際して關はるところは主觀的の事柄であり、其の何に基くかこそ重大なれと人に説く所の良心或は文化の問題である。これは決して科學ではあり得ない。吾々は斯くて今日其處を支配しつゝある懷疑を感得すること甚しき

過ぐるのみ。それ等は許されねばならなかつた、それなしには科學的社會政策は不可能であつたのである。吾々の尊敬する帥たる、シムモラー、ワグナー、及びブレンタノの如きは彼等の良心に對する時代生成に含まれたる訴に依つて深く動かされたる、又動かさるゝ人々である、併し斯の如くにしては遂に一の人格的の、一の信念に基づく最終の根據に至るのみであつて、一の客觀的なる各人より認められたる社會政策とはならない。然り今や此等は政黨並に利害關係者、階級、個人的人生觀の領域に引渡されたかに見える、即ち直ちに非科學的ならざるを得ないのである。

然し乍ら、若し吾々が求むるところのもの、不可能なりとして證明せられたものを既に有せりとすれば如何、若し吾々が單に之を意識に上せることを要するのみとすれば如何。若し吾々が全然之を頭腦より發見せんとせずして、恰もマルクスが之をヘーゲルより學びたるが如く、現實より見出さんとしたりとせば如何。

眼を現實に注げ、然らば吾々は産業勞働者階級に相對する社會政策を、避け得べしと認められたる衝突を調停し、仲裁し、反對を緩和し、之に附隨する所の危險及び損失を出來得る限り最小限度に減少せんとする一種の努力として熟知するではないか——一種の努力、それは其の個有の目標樹立に應じて或ものが之に對して合目的となりや、それは有效なりや、それは社會的平和を感亂するものに非ずして、之を招致するものなりや、等の判斷に於て具體化する。第二に吾々は鬭争に敗れたる、保護を要求せる黨派を擁護するところの社會政策を見るではないか而して茲にも亦それが事實救濟するや否やの個々の量定に對する技術的判斷の可能性が生ずるのである。

吾々は文獻史的に社會政策の此等の二個の努力が屢々分離せることを見る。其の極は、一方に、如何なる價に於ても只管に平和を希ふ階級闘争の反對者、他方にブレンタノや亦實にマルクスの如く、勞働者を擁護して彼等の爲に先闘者或は辯護者となり、其の闘争の歡びを一貫せる生涯の任務となせる彼の勞働者辯護者との間の反對を見るに至つたこともある。而も吾々は亦ロドベルトス、ワグナー、シニモラーに於けるが如く二個の努力が結合せらるゝ場合をも見る。

是等總ての場合に於て性向、人生觀、人格的確信、約言すれば主觀的なるものが關係するとは確である。然しそれのみであらうか。一切の方向が或る尺度の下に多少共落合ふものとすればそれは唯一時一定の權力關係に對する妥協、承認としてのみ生成したる事實であらうか。其の科學の若きにも拘はらず、又或は階級的暗示或は政治的黨派理想、或は宗教的獨斷、或は個人的感情よりして常に其の領域を脅かしつゝある影響のあるにも拘らず、尙國民經濟學者が此等二つの目標樹立―社會的平和及勞働者擁護―に於て、甚だ驚くべきも屢々或る種の同意に歸することありとしても、其處には果して大人物又は時代理想の影響、要するに外經濟的なるものより認められないであらうか。

國民經濟的に私には次の様に思はれる、即ち平和は人口の益々稠密なる、又密接に相錯綜せる相互作用の下にある近代世界と共に與へられたる一の要求であり此の人間集團の生存のみをも辛じて可能ならしむる一の要求である。國際戦争或は市民戦争が如何に近代の國民經濟乃至世界經濟を破壊するかは吾々の體驗したところである。

吾々の現状に就て此の生存の根本を委ねられたる一科學の勸告は斷じて其の生存根本の支持と確立とに向けられたるものゝ外ではあり得ない。それは相反且せる資本主義の國民經濟に對する透徹せる洞察を、其の生存根本に屬する平和的交通の事實に結び付けて、鬭争緩和の爲の努力とする。斯くして社會政策的に何が爲さるべきか、それは果して、又如何なる程度に於て、平和に導くものなりやが國民經濟的に判斷し得ることとなるのである。それ故に其の時々に與へられたる「Mentalität」(精神的傾向)は重要となる。諸の方法はそれに適當せねばならぬ、然らざればそれは偽である。唯結局に於ては、各人が均等に満足せられ得る限りに於て、即ち狀態がそれを許容する限りに於てのみ平和は可能であり、之を深く研究することこそ最も實行し得べき社會的平和の前提條件の認識に導くものである。吾々は一階級の苦難を充分の理解を以て負擔することに依つてのみ、それ等を「慰める」以上のことをも爲し得る。故に、一般に避くべからざる反目が許容する限りに於て、從來喧嘩腰に出づるより外に術なき人々に對する單なる辯護も、以て平和に導き得るのである。既に此のことは更に第二の點に導く。方向にして一旦與へられたりとすれば、科學は之に對して、或は殘忍、神聖なる感情の毀損、放縱、傲慢の如き、感情の勃發に基く不必要なる争の増大を避ける様に指導することを得るであらう、此等はやかて其の後作用の下に他の階級に報はれるものである。茲にこそ共通の利害がある、若し摩擦の損失が大となり、荒廢せる社會的稠帯の危険が増大するゝとせば全體は兩階級の苦しむところを苦しむのである。雇主側の計算に依れば一二五七ミリオンの勞働時間、或は(一時間五〇金ペーニツヒとして)六二九ミリアン金貨マルク、が僅に一九一九年より二二年迄

の間に獨逸に於てストライキの爲に失はれたりと云はれるのであるが―茲には再調査せず―これ、斯かる緩和せらるべき磨損の一例である。又露西亞の運命も常に脅しつゝある焦眉の危険に對する最も躍動せる一例である。獨逸に於ける社會政策は極めて特殊なものであつて、例へばそれに依つて吾々が破滅するが如き治療劑の或る用ひ方に對する、即自己粉碎に對する治療劑である。社會政策は全く一般的に力の消耗の節約と相對する、即ち消耗をより少なき量に減少せしめることと相對する。従つて積極的の仕事として残されたるところは益々大である。或ものが然らずとも不幸に沈溺するとすれば、社會政策は愈々重大である。一國が貧困になればなる程、又相互に浪費の奢侈に對して殘されたる所少ければ少き程、其の意義は高くなる。斯かる場合、社會政策は一の奢侈ではなくて、反つてそれに依つて避けらるべきものこそ奢侈である。一般の云ふが如く、社會政策は花咲ける經濟生活のある所にのみ繁榮し得るのではない。そは反目に依つて破滅せしめられざる經濟なるが故に偶々基礎と共により榮えたものである。

以上は其の第一である。それは云はゞ吾々の目的より生ずる、即ち近代の産業諸國の稠密なる人口が依つて以て其の生存を樹立する所の一切の要素の、平和なる交通に依頼せる、協力としての國民經濟より生ずる。一切の將來に亘つて事態斯くの如しとするならば、今日殆んど認められざる社會政策の此の國民經濟的意義をその時猶認識せざる人々は盲目として責められざるを得ないであらう。

扱第二の「より弱き」但し之は自然的弱少或は價値の小なることと混同されてはならぬ、然らずしてそは歴史

的狀態に基くものである) 部分に對する辯護は單なる協調の附屬物ではない。否文獻史的に我々の前に明に横はれる國民經濟學の發展は遂に此の新しき科學は、之が錯綜せる近代的經濟生活、約言すれば國民經濟に耐え得ざるに至れるとき、同時に多數に對する相談役として發生したるものであるとの公式に考へ及ばしめる。茲に問題は、單に効果を擧ぐる爲に個人は如何に經濟せざるべからざるかのみではない。勞働者と雖も其の家計に於ては極めてよく經濟するかも知れない、——但し普通には之は勞働者も、又工場勞働の爲にそれに對して教育せられざる彼の妻も共によくせざるを常とする所ではあるが——而も其の最良の場合と雖も尙外的利害への從屬が彼の効果を狭少にする。此のことはラサルレが「バスチア、シュルツエ・フォン・デリーツエ」に對して、既に六十年以前、同名の文章に於て、證明したところである。獨り個人にのみ感謝すべき、獨り個人にのみ達せらるべき厚生獲得の自由主義的にして全く非國民經濟的なる夢は今や醒まされて居る。階級的隸屬に依つて、其の經濟効果を制限せられるものは獨り産業勞働者のみではない、吾々總てが、其の經濟效果に於て吾々を繞る前提條件に依賴して居るのである。而して此等の前提條件こそ國民經濟學者の研究する所である。このことは彼をして同時に多數に對する勸告を可能ならしめる。而も彼は彼等の全部に對しては唯實際各個人に勸め得ること、即各人をして彼の出來得る限り成功せる經濟を通して、其の人格的究極目的を能ふ限り達成せしむるものを勸告し得るにすぎない。此の意味に於てあらゆる人々に好都合なることこそ國民經濟學者の勸告であらねばならぬ。彼は實際各人に對して好都合なることをのみ推薦すべきものとして答へ得るに止まる。例示的に云へば斯くの如きは唯後

に至つてこそ意識せられる所である、即ち國民經濟學者の推擧したる職業の自由は如何にも自然力を應用せる近代的企業を通じて全體の厚生を増進はした、然し乍ら手工業者及産業労働者は此の勧告の犠牲であつたのである。其の勧告は人口の密度如何に依つては、多少共避くべからざるものであつた、蓋し斯くてのみその生存は可能とされたのであつたから、——而して之に依つて其れ以外の一切のもの、達成、否、利用可能性に對する前提條件が可能とされたのであるから。——然し乍らそれは、其の進歩をして實際各人に利益ならしめ得たるが如き一の勧告に依つて完全せられねばならなかつた。鎖を解かれたる資本の力に依つて害せられたるもの、踏みにぢられたるもの、或は搾取せられたるもの、即手工業者及び近代的産業に於ける其の後裔たる産業労働者に對する辯護これである。彼の資本主義の解放は屢々國民經濟學が先づ自由に門戸を開くことあつてのみ始めて繼起したるものである、故に後に至つてそれが「再び」國家を叫ぶとき、それは恰も自己懂着であり、心機一轉であるかに見える。が現實に於ては、それは、一層稠密となれる人口に當つて避くべからざりし最初の勧告の完成として甚だしく遅れ來れるものに過ぎない。シュモラー並に社會政策學會の氏の共同設立者に於ては兩者は既に結合せられて居る。彼等は職業の自由を辯護し、又不可缺となれる大企業を辯護する、而もシュモラーは其の書を通じて小企業者に與へられたる確固たる意識を以て、此の爲に重荷を負されたる産業労働者てふ新階級の運命を改善せんとの希望を持ちつゝ、手工業者及び他の一切を辯護するのである。斯くして始めて答へ得べき、各人に好都合なる一の勧告を生じた。斯くして始めて専門家は個々の自ら好む個人に對するに非ずして、一切の人々に同時に

最も好都合なることを勸告すべき職責を果したのである。

然し乍ら其の制限は如何なる程度に迄行はるべきか、吾々が從來不利益なりし一を辯護しつゝある間に他のものの番は來らざるか。これ茲に自ら入り來る問題である。

獨り一團として一切に好都合なること、即ち状態の如何に應じて其等の生存に必要なこと、これのみが其處に限界を劃し得る。

目的は固より人格的である、然し乍ら其の第一次の目的、即ち生存は不可缺である、——唯單に生存そのもの爲にでは無く、一切の願望、然り其他の一切の富の利用を可能ならしむるものとして。生存は此の意味に於て經濟的に先頭に立つ。それは決定せねばならぬ。全體状態が補助源泉と人口との比例に應じて要求するところのものが決定の基準を捧げるのである。それ等は種類も多く又状態の如何に依つて決定的なる度合を異にする。が一切は相互に充足する。吾々の場合に於ては、「資本形成」に依つて有力にせられねばならぬものは「資本」として總括される大なる補助手段であり、又適當なる「人間經濟」に依つて増進され、維持されねばならぬものは労働を可能ならしめられたる労働力である。此等二つの、全體結果に對しては——恰も愉快なる労働が指導に於ても實行に於ても等しく重要なると同じく——共に欠くべからざる要素は、屢々一方を高揚して充足される。此のことから、何人がが丁度浸害せられたる状態に應じて一方又は他方に對する辯護の可能を生じ、又全體状態に關して今、自らなし得ることを生ずる。

又茲に於てこそマルクスが之を示し、之を見たるが如く餘剩價值即ち、生活必需品以上に出づるもの、又それ故に實際生活に於ける願望を多少共達成し得しめるもの、が争の點となる。單なる生存ではない、それは唯前提條件であるに過ぎない。生存はそれ自らとしても之を「人間らしき」存在と受取ることが出来る。生活に對する時間、人生に於ける最終の願望に對する手段、これ等は先づ各人に對して實際彼の目的を出來得る限り達成し得る様にするところの「效果多き經濟」である。

併し、それが只今一切の人々に對して如何なる程度迄達せられて居るかは又別の問題である。此のことは時に不利益なる階級に對する辯護の限界を狭少にするかも知れない。困難を切り抜ける爲には、企業の休止及び之に應ずる總ての人々の收入杜絶の結果たる一層大なる困窮を招かざる爲には、又失業者が結局は彼等の懷中から一雇主及び労働者の一直接及び間接に彼等の扶養を受けることなき爲には、約言すれば一層不良なることを豫防する爲に、勸告者は時に細心に節制せねばならぬ、假令其の場合彼が例へば生命の危険を嚴格なる處方に依つて驅逐する醫者の如く、如何に冷酷に又如何に不快に感ずるに相違なしとしても。

これ状態に應じて甚だ異なる結果となる所の經濟的觀點であり、これが其の時々に決定を與へるのである。社會學的構造に依つて吾々の社會に固着せる制限は一層狹隘である。第四階級の解放とは尙未だ空中の樓閣である。現在としては單に「自由競争の可能性」てふ殘存の形式以外に更に更に一層狹隘なる制限を以て考慮せられねばならぬ。而も又状態に應じて確に多少共意義ある可能性は看過せられてはならない。それは次のことに根據を有

する、即ち資本はそれが隣接せる餘剩價値の源泉、即ち勞働者搾取を妨げられれば、丁度このことに依つて從來看過せられ易かりし他の利潤源泉に押し集められることこれである。假に利潤の唯一の可能なる招來を以て困窮と苦惱のみなりとせよ、然らば資本主義的生産に於ける社會政策家の任務は解き難きものである。然し乍ら彼は、正しく國民經濟の全部を通觀するが故に、經濟的に優れたる一洞察を以て、資本をより有害ならざる利潤可能性へ導き得る。これも亦マルクスが機械の完成並に企業に對して示せるが如く尙其の危險を伴ふものである。併し同時に亦完全に調和的なる、固より只制限的のみに應用し得る可能性も存在する。

吾々が判斷の根據を得んが爲に只今、先づ抽象的に、次いで一般的に引き出せる所のものゝ一切が之に關係する所の社會を想起せよ、それは常に其の國民經濟を現はすものとしての一國家の枠の内にあり、又其の影響の下にある吾々の近代的交換社會である。それは人格的財産に基いて立つ。共産は古代の殘餘に於てのみ望み多きに止まり、尙未だ集團を成せる開始に對しては何等の根據をも有しない。然り若しそれが發生するとせば、それと共に共産經濟に依る資本形成難が発生する。蓋し資本形成は貴族主義的には極めて容易であるが民主的には俄かに容易に達せられない。「新貴族主義」は、其の迅速に増加する地代所得の力に依つて容易に資本を形成することを得た。より少くと云はんよりは寧ろよく多く！ それ故に又恐慌が結びつけられ—云ふ迄もなく亦近來の資本の缺乏が齎されたのである。然し何れにせよ、消費組合の「配當病」は共産經濟に於ける資本形成の甚だ容易ならざる證據である。資本主義は貧者を貧なるが儘に放任し、富者を愈々富裕ならしめつゝ資本形成を容易にす

る。貧者側に於ける此の強制的抑制は貧者をして益々より困難なる——富者のその甚だ便利なると相對して——資本形成に隣接せしめるのである。

富者の資本形成に關しては、今や之を彼等の「職能」として議論すべきではない——恰も富者のみが、而して一切の將來に亘つて富者のみが資本形成を可能ならしむるが如くに——。然らずしてそれは、勞働者階級が單なる資本形成に従屬するに非ずして、其の全く特定なる投資——勞働者の使用——に従屬して居ると云ふ不可避の意味に於て論ぜられねばならぬ。此のことは決して忘るべからざる——而も一九一八年以來甚だ屢々忘れられたる——社會政策の限界に導く。もはや充分なる資本は形成せられず、或は資本に對して利潤が補償の可能性さへなしに蹂躪せられ、爲に資本が離散するとせば、然らば其の結果は失業之に應ずる困窮及び窮迫、即ち多數の虐使可能性である。

此等の限界は結局は資本主義より生ずる、即産業勞働者の全部が、又特に其の新部分が、現代國民經濟を指導する所の國民部分への從屬てふ意味に於て、又事實他の部分の爲に包括して經濟する企業者の意味に於ける「經濟」への從屬てふ意味に於て、資本主義より生ずるものである。販賣・大量生産及び大量消費・生産に於ける材料消費の節約是等の一切は企業者の手中にある。彼等が之を爲す限りに於て近代的人口集中は——例へば英、獨、白に於けるが如き——可能とせられるのである。一定面積上の人口集中の極端としての勞働者階級は單に彼等の私的所有欲に依頼するのではなく、尙その技術に——それが證明せられる如く——全然依頼するものである。若

し勞働者が其の契約の相手方を甚だしく害して此等をして希望を失はしめ、或は全く競争不能ならしめるとすれば、之れ彼等が自らを害することに他ならない。

他面に於て、或は屢々相互に價格を過大に惡化せしめ、或は翼々として如何なる小利益をも追及し、又屢々技術的に充分に利益づけられざる、終には殆んど全く人間經濟に通ぜざる企業者側に於ても先づ幾多の——勿論限定せられたる——可能性が生ずる、例へば時宜を得たる買手への可能なる轉嫁、制限的なる利潤禁止、且は甚だ迅速なる技術的進歩に依つて何ものよりも上昇せられたる其の勞働能力を通して向上したる勞働階級の一時的決定又は繼續的決定の如きは之に屬する。(2)

(2) 詳細は余の著『經濟』『社會主義』『婦人勞働者保護と家内勞働』を参照せよ

總て是等は既に早く個々の大人物に依つて取得せられたところである。オウエン、アツベ、フレーゼ其他多數の人々は夫れ夫れ甚だ人道的であつて、利潤の熱望にかられて天より彼等に托せられたる人々に對する配慮を忘れ、従つて又一切の合理的なる人間經濟への配慮を離れて效果なき勞働時間の延長に走るが如きとはなかつた。實にフレーゼは、アツベと同様、既に一八八七年には自ら、充分に休養したる勞働者を得んが爲に、組織的に、且自發的に勞働時間の短縮を試験したのである。然り、彼はフーフエの土地に暗示を得て八時間分割を以て自然的なりとの歸結に到達し、一八八九年次の説明を加へて八時間勞働日を彼の勞働者委員會に宣告した、曰く、自分の考に依れば、それが自分に提供するところは、より長き勞働時間と異なるところはないであらうと。然るにそれは勞

働者から拒絶せられたのである。即ち彼等は自ら之を期待せず、従つて賃銀の引上なくしては之に應じなかつたのである。併し其後これは賃銀の引上なしに試験せられ、且つ（一八九二年以來）繼續せられて居た。仕事の量はラレーゼの期待した通りであつた、而して病氣日数は5對1⁷/₂の比例を以て減少したのである。

實際仕事の量が減少しない場合には雇主自らより短き労働時間を採用すると云ふことは、個々の雇主に對する限りに於て——之をポーレは一切に對して主張するが——眞である。然し一般的には一百年の經驗が之を無視して行動して居る。其の一步一步は頑強にして執拗なる反對の下に戦はれ來りしものである。幾十年の斯かる鬭に曝されて來た彼の十時間労働法案ありて始めて、斯かる了解は始まる、即ち社會改革を通して始めて斯かる了解が自然的に始まるものではないのである。

このことは人間經濟の高揚の、一つ、一つに妥當する。仕事の量を永きに亘つて擁護促進するところのもの、一切は常に耐え難き「重荷」として示され來つたものである。工場衛生、災害豫防、職業用毒物の禁制、兒童の除外、従つて又其の保健、婦人労働者の保護即母性従つては、より有力なる次の時代の保護、病者並に罹災者に對して彼等を再び生産者たらしめんが爲の配慮、母胎より高等小學校——之亦企業者に依つて「重荷とされたる」所であるが——に於ける成人に至る迄の幼年の保健、總てこれ等はオウエン、並に彼等に従ふ人々に依つて新に獲得せられたものである、而も労働組合と國家の干渉との間の鬭争を通してのみ獲得せられたものである。茲に國家はリストの所謂教育關稅に於けるが如く行動する、それは將來の爲に現在の犠牲を強制するのである。個人は或

は茲に雇主として、或は彼處に買手として振舞ひ、大なる集團としての自發的行動に熟せしめる。個人は自己を慮り、國家は全國民の將來を慮る。國家は、今日憲法の配慮するが如く、勞働力を保護する。國家は斯くして常に尙一層善く勸告せらるべき一階級利益に對して全體利益への顧慮を強制する。國家は斯くして企業者を從來彼に依つて看過せられたる諸の可能性に導く。緩漫ではあるが而も漸次に——*Arbeitsgeberliteratur* に於ける最近の言明に示さるゝが如く——企業者にも適當なる了解が成立する、あまりにも奉仕に忙はしき彼等の利益代表者（所謂國民經濟學者）は、若し一片の人間經濟にても成就せられんとすることあらば、其の度に豫め産業の崩壞を豫言して居たのであつたけれども。

茲に於て自ら——永久に動かすべからざる、而も現在に就いては之を合計せざるべからざる——三個の國民經濟的要求が社會政策に對して生ずる。社會政策は資本を脅かしてはならぬ、その發動を壓殺し、又は其の形成を全然不可能ならしめてはならない。社會政策は此の限界の下に通常弱少なる階級を助け、以て、分裂せる全體利益の中に於て企てられることが實際各人に好都合なる様、各人に其の目的を出來得る限り達成せしむる様になければならぬ。又何よりも、先づ一切の人間經濟に役立てる標準を通じて、生産結果の他の要素（即ち勞働者）を、恰もそれが全體利益の中に横はるかの如く、又實にそれが資本利益の中に横はるかの如くに保護しなければならぬ、而も之に就いては屢々全く理解せられず又遵奉せられて居ない、勞働階級自身よりすら今尙常に理解、遵奉せられては居ないのである。斯くて「各人に對して各自のと」が確保せらるれば第三に社會政策は摩擦を緩

和し、焦眉の危険を豫防せねばならぬ、約言すればそれは、人口がより調密となりゆくと共に、状態がより困難となると共に、更に人が自ら責任を負はざるべからざる任務のより困難となると共に愈々重大となりゆくその職能を果さねばならない。

ロバート・ヅキルブランド
中山伊知郎譯